

幼稚園における子育て支援の利用状況（第2報）

荒牧美佐子¹ 安藤智子¹ 岩藤裕美¹ 丹羽さかの¹
立石陽子¹ 砂上史子² 掘越紀香³ 無藤隆⁴

幼稚園における子育て支援プログラム利用実態に関する第1回調査（2004）に続く、第2回調査結果について、その概要と、第1回調査との比較結果を報告する。

本研究では、全国の幼稚園に子どもを在籍させている保護者（ $N=4169$ ）並びに、現在、幼稚園における未就園児向け子育て支援プログラムを利用している保護者（ $N=420$ ）を対象に、幼稚園における子育て支援について質問紙調査を行った。質問紙内容は、第1回調査同様、①預かり保育、②子育て相談、③未就園児に対する子育て支援の3つのプログラムに焦点をあて、主にその利用状況、利用に際しての理由、利用後の感想などを尋ねる項目により構成した。調査の結果、「預かり保育」については、利用者の増加傾向が見られた。「子育て相談」は、送り迎えの際に園の先生との間で交わされる日常的なやり取りの延長上にあるという実態が明らかとなった。「未就園児向け支援」では、子ども同士の交流の場として、幼稚園の施設開放などが定期的に利用されていることが多いことが明らかとなった。

目 的

少子化や核家族化などにより、地域や家庭における子育て機能の低下しつつあることを背景に、2001年度に制定された「幼児教育振興プログラム」(文部科学省、2001年4月)の中では、幼稚園が「親と子の育ちの場」としての機能を果たすことの重要性について触れられている。こうしたことから、幼稚園における子育て支援を実際に利用する側の保護者に焦点を当て、その利用の実態について明らかにしていくことを目的として第1回調査を行った（2004）。

本研究では、その第2回調査として、第1回調査と同様に、幼稚園における子育て支援のうち「預かり保育」、「子育て相談」、「未就園児向けの子育て支援」に焦点を当て、保護者らの利用実態や利用理由、利用後の意見などを調査した。引き続き第1回調査の協力園を調査対象とすることで、第1回調査の結果との比較を行うことを目的とする。

方 法

1) 調査概要

全国の幼稚園を対象にして、2004年2～3月行った第1回調査（荒牧・安藤・岩藤・金丸・丹羽・立石・砂上・掘越・無藤，2004）の協力園のうち、引き続き調査への協力を得られた46園を対象に、質問紙による第2回調査を行った。調査時期は2005年2～3月。質問紙は、協力園を通じて保護者に配布してもらい、記入後、回収をお願いした。

2) 調査対象

質問紙対象者は、園に子どもを通わせている保護者並びに、未就園児向け子育て支援プログラムを利用している保護者である。これらの保護者のうち、大多数を占める母親のみを分析対象とした。それぞれ幼稚園に子どもを通わせる群（以降、「在園児群」とする）は4169名、未就園児向け子育て支援を利用している群（以降、「未就園児群」とする）は420名である。

また、第1回調査の結果の中から、本調査でも協力が得られた園の母親4543名のデータ（以降、「第1回群」と呼ぶ）を抽出し、本調査結果との比較を行うこととした。

キーワード：幼稚園、子育て支援、預かり保育、子育て相談、母親

1 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科 2 千葉大学教育学部 3 大分大学教育福祉科学部
4 白梅学園大学／お茶の水女子大学大学院人間文化研究科客員教授

3) 調査項目

質問紙は①在園児群用と、②未就園児群用の2種類を作成した。①②に共通して、回答者(保護者)の年齢、職業、学歴、家族構成、そして子どもの属性等のフェイスシート項目を設定した。そして、①には園における子育て支援のうち「預かり保育」と「子育て相談」、②には「未就園児向けの子育て支援プログラム」それぞれの利用実態、利用理由、利用後の感想に関する項目を加えた。

結果

1. 対象者の概要

在園児群の母親のうち、30歳前半が全体の40.3%を占めもっとも多く、未就学児群でも同様に49.8%、第1回群も43%と高い割合を占めた。

母親の職業形態については、3群ともに、全体の約7割を専業主婦が占めているが、中でも未就学児群にて高い割合であった(在園児群で全体の67.1%、未就学児群は79.3%、第1回群は71.5%)。

第1子の平均年齢は、在園児群で7.1歳(SD=3.0)、未就学児群は4.9歳(SD=2.6)となり、在園児群の方が高かった。一方、第1回群の平均年齢は4.8歳(SD=0.9)と在園児群に比べ、低い結果となったが、これは、第1回調査では、在園児群と未就園児群とを分けずに調査したため、未就園児すなわち3歳以下の子どもが含まれているためであると考えられる。

2. 預かり保育について

1) 利用状況

預かり保育を利用したことがあるかどうかについては、第1回調査同様、預かり保育を「利用したことがある」「利用しようと思ったことはあるが、まだ利用していない」「利用しようと思ったことがない」の3項目でたずねた。結果は、図1のとおりである。

第1回群では、「利用したことがある」と答えた母親が全体の約半数であったのに対し、本調査では、6割程度に増加しているのがわかる。その一方で、「利用しようと思ったことはあるがしていない」「利用しようと思ったことがない」と答えた割合は若干減少している結果となった。

2) 預かり保育の利用頻度

続いて、預かり保育利用者の利用頻度について、「1週間に1回以上」「2週間に1回」「月に1回」「数ヶ月に1回」

月に1回」「1年に1回」の5段階で尋ねた(図2)。

預かり保育の利用割合そのものが第1回群よりも、今回の調査の方が増えているので、利用頻度全体も増加傾向にあるのは当然だが、段階別に見てみると、「1年に1回利用」と答えた母親の割合が他よりも、若干変化が大きいことがわかる。

3) 預かり保育の利用理由

預かり保育を「利用したことがある」(図1)という回答者を対象に、預かり保育を利用する上で、最もあてはまると思われる利用理由についてひとつ挙げてもらった。その結果を図2にまとめた。回答者の人数は、第1回群が2362名、第2回目の在園児群が2636名である。

第1回群・第2回(在園児)群ともに、利用の理由として、もっとも多くあげられているのが「一時的な用事(授業参観、美容院など)」であった。しかし、その割合は第2回目の方が高く、全体の約半数がこれを理由に挙げている。また、第1回群では、2番目に多く挙げられた理由として、「友人との交流や趣味など自分の時間をつくるため」(20.1%)が続いているが、本調査では「仕事のため」(19.3%)が「友人との交流」よりも上位に位置している。一方、第1回群では多かった「子どもが友達と交流する場を作るため」「家事などの用事」などを理由に挙げる母親は前回よりも減少している。

4) 利用後の感想

続いてもまた同様に「利用したことがある」と答え

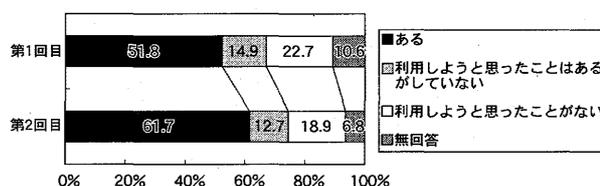


図1 預かり保育の利用状況

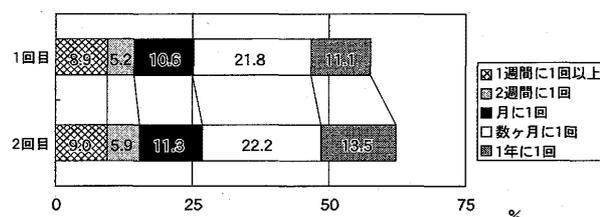


図2 預かり保育の利用理由

た回答者に、預かり保育を利用して初めての感想について、項目ごとに「あてはまる」～「あてはまらない」までの4件法で回答を求めた。図3にはそのうち、各設問に対して「あてはまる」と答えた割合のみを示した。

それぞれの項目への回答結果について、第1回群と第2回（在園児）群とで大きな差はみられなかった。前回の調査結果同様、「安心して預けられる」「子どもが活動を楽しんでいる」「預かり保育の内容に満足している」などの保育そのものに対する満足感とともに、「ニーズに合った時間帯である」「料金にみあったサービスである」等の利用のしやすさなどの理由が上位に挙げられた。

また、今回は「自分自身がリフレッシュできる」を新たに項目として加えたが、これについては、全体の3割程度が「あてはまる」と答えている。

5) 利用しない理由

一方で、「利用しようと思ったことはある」「利用しようと思ったことがない」といった利用未経験者に、預かり保育を利用しない理由について尋ねた（複数回答）（図4）。

最も多かったのは、「幼稚園に預かり保育がない」であった。次に多かったのは「家庭で子どもと過ごす時間を大事にしたい」であったが、第1回群では25%がこれを理由に挙げているのに対し、第2回（在園児）群では、20%程度に若干減少している。以下、「子ども

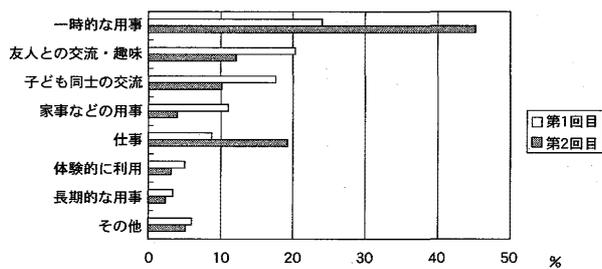


図3 預かり保育の利用理由

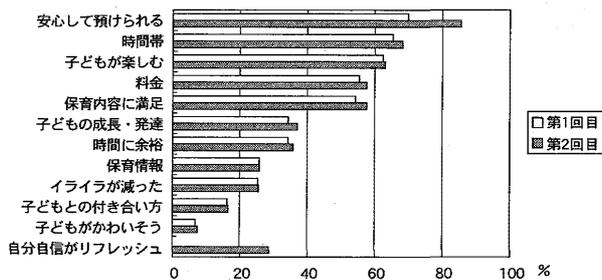


図4 預かり保育を利用しての感想

が利用を嫌がる」、「長時間預けられて子どもがかわいそうさ」、「料金が高い」と続くのは前回も今回も同じく、どれも選択率10%未満となっている。

また、この他に、今回は「他に預け先がある」、「お迎えが大変だから」「子どもの年齢や親が働いていることなど、利用の制限があるため」の3項目を新たに追加した。「お迎えが大変だから」「利用制限があるから」と答えた母親はともに10%未満と少数であったが、「預け先がある」と答えた母親は、全体の25%くらいと多く、続いては、その預け先の内訳について示す。

6) 利用しない理由

主な預け先として、幼稚園の預かり保育も選択肢に入れて回答を求めたところ、もっとも多かったのは、「自分の親」であった（図5）。幼稚園はその次に多く、配偶者や配偶者の親よりも、預かり保育をいざという時の預け先として利用している実態がうかがえる。

3. 子育て相談について

1) 相談頻度

次に、子育てに関する相談頻度についてたずねた。第1回調査では、子育て相談について、預かり保育に関する質問項目と同様、子育て相談を「利用したことがある」、「利用しようと思ったことはあるが、まだ利用していない」、「利用しようと思ったことはない」のいずれかで答えてもらったが、今回は、幼稚園の先生に子育てに関する悩みについて「よく相談する」、「時々相談する」、「まだしたことがないが必要があればしたい」、「相談しようと思わない」の4段階で回答してもらった。これは、幼稚園における子育て相談が、必ずしも、事前に予約を入れて時間や場所をきちんと確保するといったような形式的に整えられた状況下において実施されるものではなく、子どもの送り迎えの時における立ち話など、日常的な場面の中でのやりとりも広義の子育て相談に含まれると考えたためであ

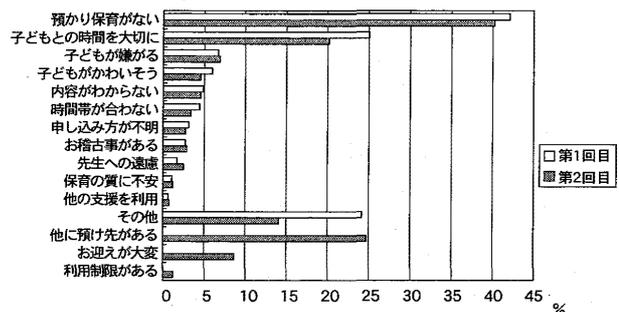


図5 預かり保育を利用しない理由

る。つまり、子育て相談を「利用する」という表現をやめ、今回は、幼稚園の先生に子育てに関して相談する頻度を尋ねることとした。

その結果を図6に示した。「よくする」、「時々相談する」をあわせ、全体の5割以上が園の先生に子育てに関し、相談していることが分かる。

2) 相談時の状況

子育てについての悩みを「よく相談する」、「時々相談する」と答えた母親に対し、相談がなされた状況について尋ねた(図7)。

利用状況としてもっとも多く挙げられたのは「送り迎えの時」であった。続いて、「保護者会・懇談会で」、「連絡帳で」が続いた。一方で、「電話で」や「予約をして」、「手紙などで」は少数派であった。

3) 相談内容

どんなことについて相談したのか、その内容について、図8にまとめた(複数回答)。

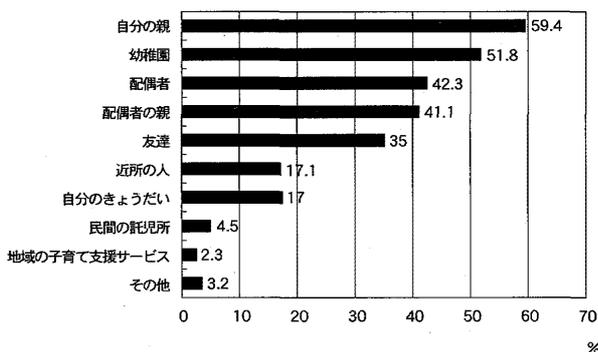


図6 いざという時の子どもの預け先

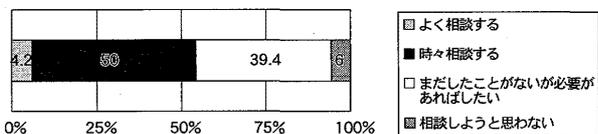


図7 子育て相談の利用頻度

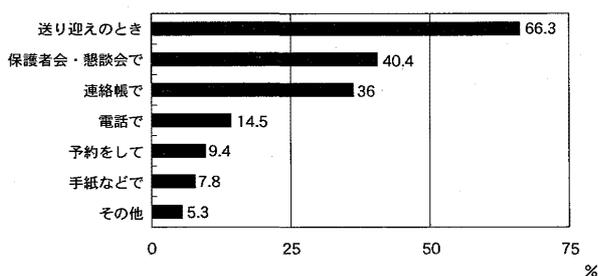


図8 相談時の状況

第1回調査・本調査いずれでも最も多かったのは「幼稚園での子どもの生活について」であり、「子どもの友達との関係について」、「子どもの身体やこころの発達・くせ等について」が順に続いた。このように子どもに関する悩みについて相談が多いのに対して、「他の保護者との関係について」「自分自身の生き方について」などの親側の悩みについての相談は、少なかった。今回は、新たに「幼稚園でのPTAや役員活動」についても相談項目として加えたが、他の親側の項目同様、回答は少なかった。

4) 相談後の感想

相談後の感想については、あらかじめ設定した項目ごとに、「あてはまる」～「あてはまらない」までの4件法で尋ねた(図9)。

第2回目でも「相談してよかった」、「また困ったときは相談したい」、「ほしい情報が得られた」「子どもや自分についての理解が深まった」など、肯定的な評価が多かった。また、相談することにより園や先生に対しての信頼感が高まったという意見も多かった。

4. その他の子育て支援について

以上、「預かり保育」並びに「子育て相談」について結果を述べたが、これら以外の子育て支援についての利用状況について、図11に示す。

「預かり保育」、「子育て相談」以外の支援として具体的には、「子ども対象の体操クラブや絵画教室など」「園庭・保育室などの施設開放」「親子遊び活動」「父親と子どもの交流の場(土曜の「遊ぶ会」など)」「子育てセミナー・シンポジウム」「母親向けのサークル活動(人形劇やコーラスなど)」「地域の子育てについての情報をもらう」の7つを挙げた。それぞれについて、利用有無・頻度を尋ねた(「1週間に1回以上」「2週間に1回」「月に1回」「数ヶ月に1回」「1年に1回」「利用したことがない」)。

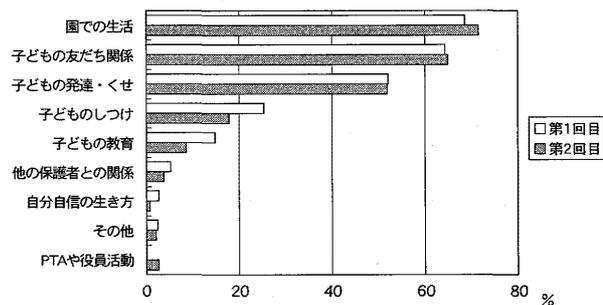


図9 子育て相談の内容

その結果、どの支援についても、第1回調査の結果とあまり変化はなかった。ただし、いずれも若干、利用者の割合が増えている傾向にあった。全体的に見て、「園庭などの施設開放」、「親子遊び」、「クラブ」、「父親との交流会」など、子ども向け、あるいは子どもと保護者とが一緒に参加できる支援の利用は、「セミナー」や「母親向けのクラブ」、「地域情報の提供」など、保護者向けの支援と比較して、利用の割合が高い。

5. 未就園児向けの子育て支援について

1) 子育て支援の内容

現時点で未就園児を対象とした子育て支援を利用している母親（420名）に対し、どういった内容の支援を、どのくらいの頻度で利用にしているかを尋ねた

(図10)。第1回調査では、在園児群と未就園児群とを厳密に区別せずに調査を行ったため、未就園児向け子育て支援に関する一部には、在園児の母親が回顧的に回答した結果が含まれている可能性もあった。そのために、今回は、調査時点で未就園児向けの子育て支援を利用している母親に回答を限定した。こうした調査法の違いから、第1回調査の結果との比較は行わないこととする。

未就園児向けの子育て支援のうち、一番利用が多かったのは「親も一緒に参加する園庭・保育室の遊び場開放」であり、全体の約8割を占めた。頻度ももともと高く、3割程度は、週一回は利用していることがわかった。そして、「子ども対象の体操クラブや絵画教室などのクラブ活動」、「子育て相談」、「預かり保育」

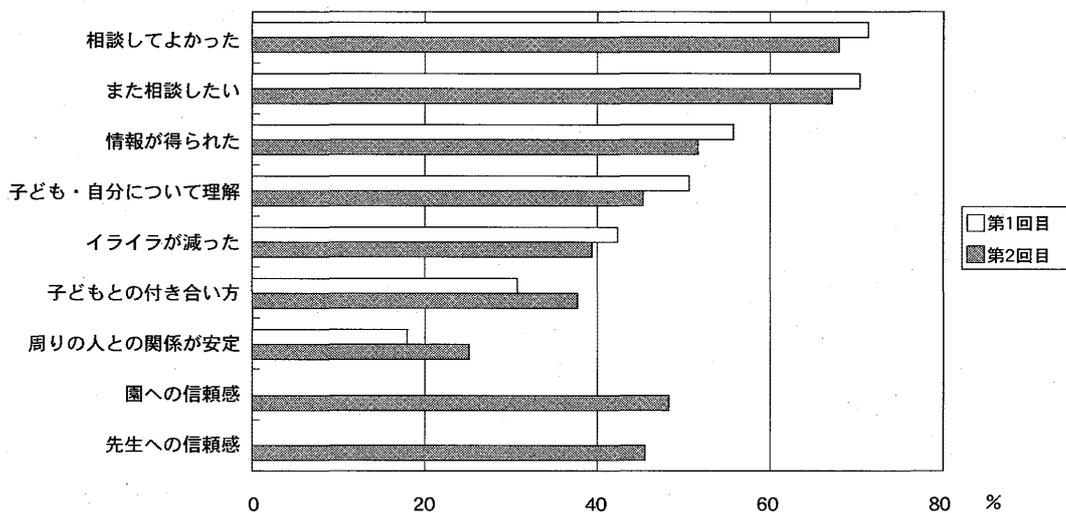


図10 子育て相談への感想

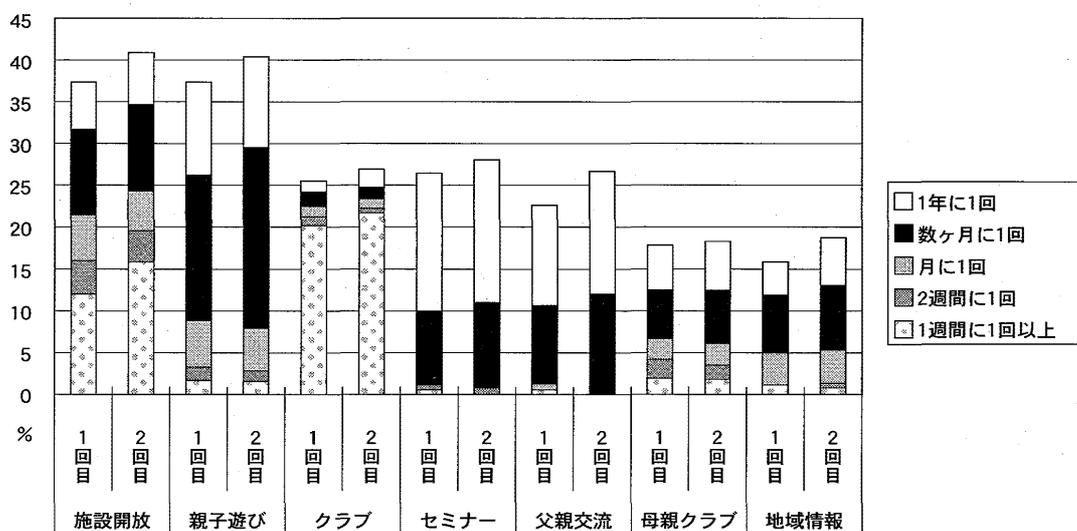


図11 その他の子育て支援の利用状況

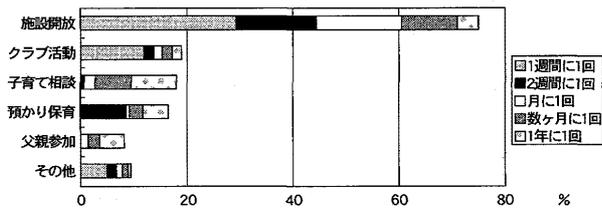


図12 未就園児向けの子育て支援の利用状況

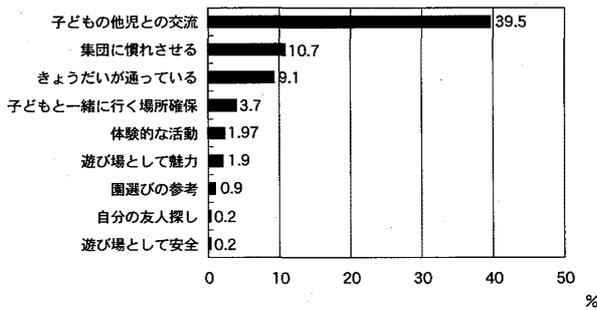


図13 未就園児向けの子育て支援の利用理由

と続く結果となった。約2割の親が、子育て相談したことがあるとも答えているが、「数ヶ月に1回」～「1年に1回」程度と答える母親が多く、全体の利用頻度としては、「預かり保育」の方が高い。

2) 利用理由

こうした支援を利用している理由については、図11にまとめた。回答者には、理由に関するいくつかの選択肢の中から、最も当てはまるものだけを挙げてもらった。

その結果、「子どもの他児との交流」が最も多く、約4割の母親が理由としてあげている。一方、「集団に慣れさせる」、「きょうだいがその幼稚園に通っている」等など、他の理由を第一に挙げている母親は、多くても1割程度にとどまっており、子どもの友だち作りが大きな理由と言える。

考 察

1. 在園児向け子育て支援について

第1回、第2回調査ともに、在園児向け子育て支援として「預かり保育」、「子育て相談」に焦点をあて、調査・分析を行った。

その結果、預かり保育については、その利用者が過半数を超えた前回の調査結果と比べ、今回の調査ではさらにその数が増えていることが明らかになった。利用頻度についてみると、第1回、第2回ともに、「月に

1回」～「1年に1回」の一時的な利用が多くなっていった。また、第1回目と今回の結果を比較すると、「1年に1回程度」の利用が若干ではあるが増加傾向にあることがわかった。このことから、定期的というよりも、一時的に利用する人が増えていると考える方が適切かもしれない。

こうした一時的利用者がどういうときに預かり保育を利用しているのかについては、その理由を見るとわかる。預かり保育の利用理由については、前回と今回とでは大きな変化が見られた。第1回目よりも、「一時的な用事」や「仕事がある」を理由に挙げた割合が大きく増えた一方で、「友人との交流や自分の趣味のため」、「子ども同士の交流」、「家事などの用事」が減少している。このことは、より重要度もしくは緊急度の高い用事ができた時にのみ預かり保育を利用する母親が増えていることを意味しているのではないかとここで言う「一時的な用事」としては、きょうだいの授業参観や美容院などを例示した。美容院は緊急の用事とは言えないだろうが、行かずに済ませられるものでもないし、子どもを連れて行けるようなところでもない。そういった意味では、誰かに子どもを預かってもらう必然性のある用事といえるだろう。その反面、「友人との交流・趣味」や「子ども同士の交流」、「家事」などは、授業参観や仕事に比べると、重要度あるいは緊急度が低いと考えられる。もともと一時的な利用者の方が多かったわけだが、母親は、より計画的に、必要ときだけを選んで預かり保育を利用するようになっていけると言えるのではないだろうか。

預かり保育を利用しての感想は、前回の結果と大きな変化がなく、「安心して預けられる」「ニーズに合った時間帯である」「子どもが活動を楽しんでいる」「サービスに見合った料金である」といった項目が上位を占めた。こうした結果は一時的な利用者が多いこととも関連している。やはり一時的な利用に限られると「子どもの成長や発達に良い影響」、「時間に余裕ができた」、「母親自身のイライラが減った」などの効果を望むのは難しいだろう。

また、預かり保育を利用しない理由としては、「預かり保育そのものが幼稚園にない」という回答以外に多かったのは、「子どもとの生活を大切にしたい」、「他に預け先がある」であった。「子どもとの生活を大切にしたい」という意見は、前回の調査でも上位に挙げられていた。預かり保育や延長保育については、保育者の50～70%前後が、子どもや親子関係、そして保育者自身にとってマイナスの影響を懸念しているという指

摘もある(中野・竹田・加藤・土谷, 1999)。たしかに、これは本調査の結果とも一致する点ではあるが、前回の調査と比べ、今回はこれを理由に挙げる割合そのものは減少しており、これは、預かり保育を利用することは、子どもとの時間が削られると考える母親が減っているということである。上記にて、すでに明らかになったように、預かり保育は、一時的な利用者が増えているだろうことから、こうした抵抗感が薄れているのかもしれない。また、一時的にかつ必要なときだけ預かり保育を利用する親の実態が明らかとなったことから、保護者側は、子どもとの関係や保護者自身へのマイナスの影響が及ばない範囲での上手な利用を心がけているとも言えるだろう。

また、今回から新たに加えた項目である「他に預け先がある」という理由を挙げる母親も多くいたが、一時的であれ、日常的にであれ、幼稚園以外に預け先がある場合には、そちらを利用し、そうした預け先がない場合には、幼稚園を利用している母親が多いようだ。なお、預かり保育の利用の有無を問わず、緊急時に子どもを誰に預かってもらうかについて尋ねた結果、第1位には自分の親が、そして第2位に、幼稚園が続いた。つまり、自分の親を頼ることができる母親は、幼稚園の預かり保育の利用が少ない、反対に言えば、そうでない場合には、幼稚園を利用することが多いということだ。配偶者や配偶者の親等のその他の身内、あるいは、友人・近所の人などを抑えて、幼稚園を預け先上位に挙げていることから、幼稚園がいざというときの頼り先になっていることが伺える。

以上、預かり保育の利用実態、利用理由、利用後の感想、利用しない理由、その他の子どもの預け先などから、母親は、重要な用事があるときのみ、一時的に預かり保育を利用している実態が明らかになった。これは、前回の調査とほぼ同様の結果となったが、その傾向はますます顕著になりつつあるといえるだろう。

続いて、子育て相談については、前回の調査とは質問の形式を変えたために単純な比較はできないが、今回の調査で、より利用者の実態を正確に捉えることができた。というのも、前回行った、「子育て相談を利用したことがあるか否か」という質問に対しては、全体の約1割の母親のみが「利用したことがある」と答える結果にとどまっていたが(荒牧 他, 2004)、今回、子育て相談の“利用”という表現を改め、「幼稚園の先生に相談することがあるかどうか」という質問に変えたところ、半数近くの母親から相談した経験があるという回答が得られたからである。各園ごとに子育て相

談の形態はさまざまであると考えられるが、在園児の場合には、特に決まった形式があるわけではなく、保護者と先生との間の日常的なやりとりの延長上にもありうるというよいだろう。実際、相談時の状況として多く挙げられていたのは、「送り迎えのとき」であり、全体の約7割の母親がこのときに、子育てに関する相談を行っている。以下、「保護者会・懇談会」、「連絡帳で」と続く。相談の内容については、前回の調査との比較を行ったが、ほぼ変化は見られなかった。やはり、子どもの園での生活に関わる問題が多く、子どものことに関しても、家でのしつけや教育、また、親自身の問題等についての相談は少なかった。このように相談内容の多くが園での生活に関することから、日常的なやり取りの中で、先生に話を聞いてもらう、アドバイスを求める、また、保護者側からの要求・要望を伝えることがなされていると考えられる。

相談をしての感想についても尋ねたが、これもまた前回との大きな変化は見られなかった。「相談してよかった」、「また相談したい」等の肯定的な評価が多く見受けられた。しかし、これは、幼稚園を通じての質問紙回収という調査方法にも影響を受けているとも考えられる。一度、園を通すことにより、自分の回答が見られるのではないかといった遠慮が生じているのだとしたら、今後は、より保護者の本音に迫るべく、調査方法にも改善の余地はあるだろう。だが、前回、今回の調査ともに、質問紙には無記名としていることから、こうした懸念の一部は払拭されているものと考えられる。

預かり保育、子育て相談の他の支援については、施設開放や親子遊びの会などを利用することが多いと分かった。また、父親参加型のレクリエーションなども、全体の4分の1程度の親が参加した経験を持っており、こうした土日を利用した活動なども積極的に行われるようになってきていることが伺える。

最後に、未就園児向けの子育て支援については、今回より、現時点でこれを利用している保護者に回答を限定した。このことにより、より正確な支援利用実態が把握できたと考える。

利用の中身としては、施設開放に参加していると答えた母親が最も多く、全体の8割程度を占めた。しかも、そのうち、3割程度が1週間に1回程度の利用と答えており、子どもを連れて、頻繁に園を訪れている母親も多いようだ。未就園児を持つ親向けの子育て相談についても、数は少ないながらも利用者があり、幼稚園に入園する前から、子育てに関する悩みを幼稚園

の先生に相談するケースも見受けられた。

また、未就園児向けの子育て支援を利用する理由としては、「子ども同士の交流のため」という答えが圧倒的に多かった。施設開放の利用者が多いことと合わせ、母親は単に子どもを遊ばせる、あるいは一緒に遊ぶためだけでなく、子どもが他児と交流できることを望み、幼稚園を訪れているといえる。少子化が進む昨今において、未就園児が、同年齢の子どもの友だちを見つける場所として、幼稚園が果たす役割も大きいだらう。

以上、預かり保育、子育て相談、未就園児向けの子育て支援に対する2回にわたる調査結果から、変化のあった部分、なかった部分を中心に取り上げ、分析を試みた。

前回の報告では、保護者側が、幼稚園における子育て支援を「親への支援も含めたもの」としてよりも、「子どものための支援」として捉えているのではないかと考えられる側面についてまとめた。今回も同様にその傾向は見られたが、園における子育て支援が、保護者にとってますます身近なものになりつつある結果が得られた。

2. 今後の課題

以上、預かり保育、子育て相談、未就園児向けの子育て支援の利用実態についての2回にわたる調査結果を報告した。ただし、これらは、調査者側が設定した枠組みの中で行われたものである。ここでは拾いきれなかった、幼稚園における子育て支援への保護者の考えや要望の本音の部分により近づけるよう、今後は面接調査なども必要だと考えられる。

文献

荒牧美佐子，安藤智子，岩藤裕美，丹羽さかの，立石陽子，砂上史子，掘越紀香，無藤隆．（印刷中）．幼稚園における子育て支援の利用状況—育児不安との関連から—．お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要．

飯長喜一郎．（2001）．子育て支援における相談のあり方．家庭教育研究所紀要，23，29-35．

伊志嶺美津子・新澤誠治．（2003）．支援のかたち．21世紀の子育て支援・家庭支援：子育てを支える保育をめざして．（pp.38-50）．東京：フレーベル館．

中野由美子・竹田真木・加藤邦子・土谷みち子．（1999）．今後の育児支援を保育者の視点から考える．家庭教育研究所紀要，21，5-44．

全国国公立幼稚園長会 編．（2003）．新しい時代を拓く幼稚園運営のポイント Q&A．東京：ぎょうせい．